

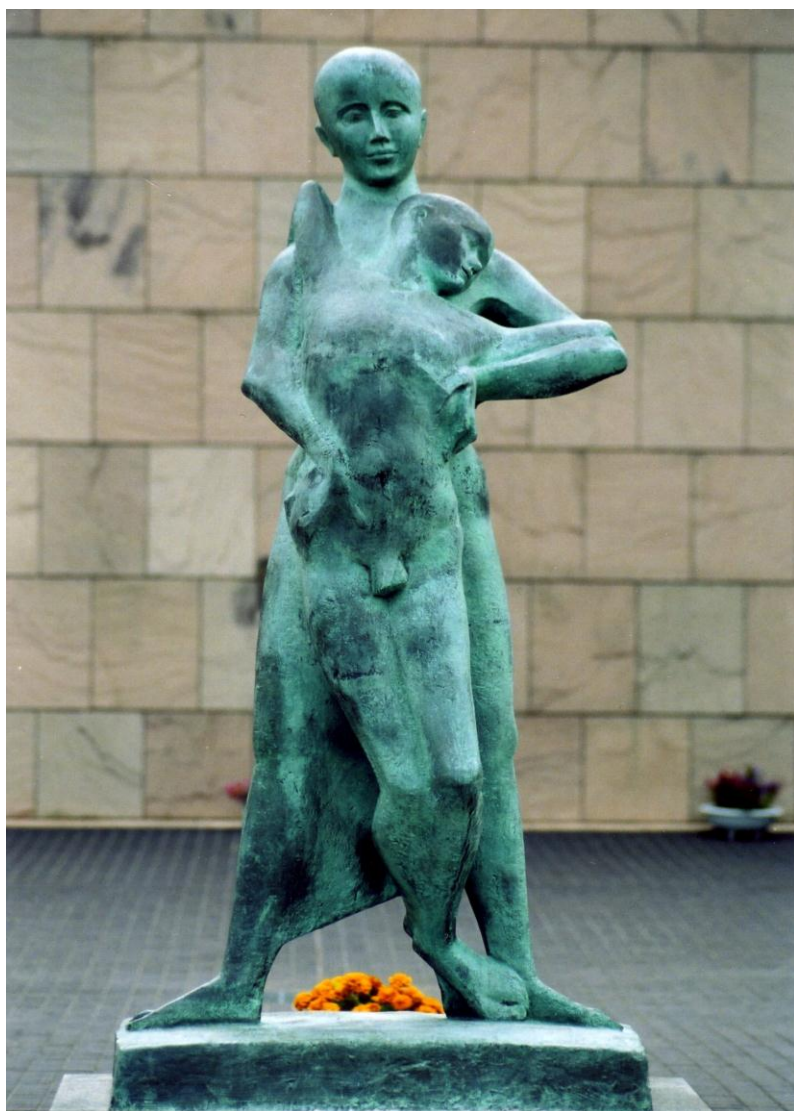
# いずみ

第22号

2008年1月1日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 22



## 《朔北の母子像》

(釧路市立博物館前庭)

1961年制作 ブロンズ・石  
高さ2.8m

この母子像は苦難に耐えて  
子供と歩む二つの心を刻んだ  
もので、作家が「朔北の母子」  
と呼んでほしいと願った。

(写真・文 仲野三郎)

## 目 次

本郷新彫刻シリーズ 22「朔北の母子像」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
新春エッセー「制作の裏側」	椎名澄子 …… 3
新春特別対談「ボランティア万歳」	丹保憲仁×橋本信夫 …… 4
ミュージアムの窓辺から「砂澤ビッキと記念館」	河上 實 …… 6
友の会日帰りバスツアー感想	菅野富夫、森 茂樹 …… 7
野外彫刻がよみがえった！	阪崎健治朗 …… 8
本郷新のちょっといい話 10 「釧路の本郷新」	仲野三郎 …… 9
友の会新年会開催 展覧会案内 編集後記ほか	10

## 本郷新記念札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（1月—3月）

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
<b>▼後期収蔵品展</b> <b>「本郷新と野外彫刻」</b> —3月30日 本郷新の野外彫刻に関する作品をエスキースや素描、パネルで紹介。	<b>▼後期収蔵品展</b> <b>「釣り人・抜海」</b> —3月30日 釣りが趣味だった本郷新の魚拓の絵や釣り仲間、風景などの作品を展示する。	<b>▼ステージVI</b> <b>「春雪の三角山」</b> 3月8日（土）	<b>▼「子ども(小学生)造形教室」</b> 1月10日(木) <b>▼造形教室(テラコッタ)</b> 2月9(土)、10日(日)

**本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709**

◇開館時間：午前10時—午後5時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西28丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環20」

山の手環状線3番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩10分

毎年冬になると思い出す出来事がある。学生時代の長期休みには札幌へ帰郷していた私だが、ある冬どうしても雪が恋しくなりアルバイト料を片手に大学からそのまま空港へ行き、札幌へ帰って来たことがある。何より、肺がキュンとなる程の冷たい空気を感じたいという一心だった。しかし大学を休むわけにもいかず、翌日にはまた東京に戻ることにした。今はその逆で、春になると無性にあの忙しい空気を感じたくなる。かつては、東京へ向かう飛

行機の中で「次の休みまで頑張るぞ！」と決意を新にし、空港から浜松町までのモノレールの中では、「もう後戻りはできない」と休みボケを振り払い覚悟を決めていたのを思い出す。

東京での学生生活を終え、札幌に戻り9年が経とうとしている。多浪して大学入学したこともあり、その時点では既に20代後半になっていた。そんな状況で故郷に帰り、社会と関わるスピードが友人たちとは全く違うことに気づき、焦りのようなものを感じていた。知り合いもほとんどなく、石膏を一つ購入するのも大変だった。大学時代に使用していた塑像板や回転台などは持っていたものの、アトリエにはほとんど物はなく、まずは土を購入することから始めた。他にも作品制作を進める中で欲しい材料がいくつもあったが、まずそれを何に使用したいのかを説明し怪しまれながらもやっとの思いで入手するといった具合だった。今では電動糸ノコ、電気窯、土練機などが揃い、ようやく「アトリエ」としての機能

を果たせるようになってきた。そして展覧会を重ねる毎に知り合いが増え、飲み友達を初めとする多くの仲間もできた。

少しずつではあるが制作環境が整う中、ショックな出来事があった。ずっとモデルとして協力してくれていた小学5年生の息子が「もういい加減、僕をつくるのはやめてほしい」と言い出した。カメラを向けても目を隠す始末である。ようやくの思いで育て上げたモデルである。これまでの道具や材料の入手

## 「制作の裏側」

椎名澄子(彫刻家)



「木の子」 筆者 作

以上に手に入りにくいものだ。母としてはそんな子どもの成長が嬉しいが、彫刻家としては複雑な心境である。しかし、あと2～3年後には展覧会の搬入出で母の作品を運ぶ姿が見られるかと思えば、今は我慢の時。これまではジッと座っていることを教え込んでいたが、これからは息子に筋力トレーニングをさせよう。

彫刻家であり母であるという今の状態がようやく楽しめるようになってきた。そして何より作品や制作過程での出会いの広がり、本当におもしろく感じられる。私の作品には、思い出の空気と息子とそして多くの出会いが詰まっている。

**しいな・すみこ** 1972年、札幌市生まれ。99年、東京芸大大学院美術研究科彫刻専攻修了。道内を中心に個展、グループ展で活躍中。昨年、友の会制作のビデオ「ブロンズ彫刻のできるまで」の取材、撮影で全面的に協力。

## 第12話 釧路の本郷新

札幌出身の本郷新は道内での作品も多い。95作品と道内最多で、そのうち釧路設置は4作品。いずれも大作、傑作だ。

今号表紙の「朔北の母子像」、いずみ7号の表紙と前号の第11話でご紹介した「石川啄木像」、釧路市の功労者を顕彰した「釧路の朝」、そして4人の作家がそれぞれの思いを表現した中での「道東の四季・冬」の4点だ。

「朔北の母子像」は北海道新聞社が創立20周年を記念して市に寄贈したもので、昭和37年5月21日、彫刻の建設地を見るために訪れた本郷新を囲んでの座談会が産業会館で開催されている。席上、本郷は「北海道は新しい造形美術がマッチする風土で、その最初の作品に私が選ばれたことは誠にうれしい」と心境を吐露し、「朔北の母子」と呼んでほしい、また、建立地も太平洋と春採湖、それに阿寒連峰を望む春採の丘をと望んで、今も眺望の良い博物館前にある。

「釧路の朝」は「鳥を抱く女シリーズ」の第12作で、同市の水産業界功労者・金井関次郎氏の功績をたたえ、市庁舎の完成に合わせて昭和41年5月8日に市役所前に設置された。平成5年に現在の観光国際交流センター前庭に移されている。

そして「道東の四季・冬」。どなたもご存知のこの像は「春・舟越保武」、「夏・佐藤忠良」、「秋・柳原義達」、そして「冬・本郷新」の4部作。昭和52年の新幣舞橋の建設に当たって、札幌の豊平橋、旭川の旭橋と並ぶ北海道の3名橋としての名に恥じない

ようにと橋上に国内の一流彫刻家の作品を置くこととし、制作管理者の本間正義氏を中心に市民と作家が協議して決められたテーマで作られた。像は静的な春と秋、動的な夏と冬という設定で全体にバランスの取れたものになっている。

冬を作った本郷新は「私の冬が、ある日は深い霧の中をさまよい、ある日は夕日を胸いっぱい抱えながら、あの大空間と会話を交わすことになれば作家として足りる」と語っている。

朝明けの橋上で、両手を高く上げ、半歩前に踏み出すその姿は動的な中に詩情をたたえて美しい。

春の舟越は、「これ以上できないとのぎりぎりのところまで打ち込んだ。釧路の皆様は四つの彫像が親しみの心を持って迎えられるように願っている」と語り、夏の佐藤は、「花たちが一斉に開く束の間の道東の夏に、人々のエネルギーは若々しく弾む。皆さんにそんな気持ちをもたれる彫刻になってくれれば」。

秋の柳原は、「釧路の秋を迎える心は内地とまったく違うだろう。きれいな感覚より厳しい美しさが私の主題を覆うだろう」と、それぞれ自作を語っている。

この4作品のデッサンとエスキースは昭和52年4月14日から20日まで、東京・銀座の現代彫刻センターで展示、発表されたが、そのエスキースが現在、札幌・南区の道路情報館に収蔵されていて見ることが出来る。

北海道開拓記念館館長

丹保 憲仁氏



丹保氏は元北大工学部教授、橋本会長も元同大獣医学部教授と、共に「エルムの杜」のOB。しかも両氏は同い年で、活躍している分野もキーワードが「ミュージアム」で共通することからこの対談となった。

1933年3月10日生まれ。北大工学部卒。69年、同大工学部衛生工学科教授。95年から2001年まで第15代北大総長。その後、放送大学学長を経て07年4月から現職。

札幌彫刻美術館友の会会長

橋本 信夫氏



1932年11月29日生まれ。北大獣医学部卒。札幌医大を経て77年、北大獣医学部教授。人獣共通伝染病研究の権威。97年から札幌彫刻美術館友の会会長。

**橋本** 北大総長を1995年から2001年まで務められた後、放送大学学長として首都圏で活躍され、昨年春、再び北海道へ戻られたわけですね。

**丹保** ええ、放送大学の方も6年やりましたし、まだ元気なので、もう一仕事しようと思ひ、札幌に戻ってきました。橋本先生も同じ年で頑張っておられるのだから僕もね…。

**橋本** 私は北大をリタイアした後は一切仕事を持たないと女房に宣言しました。その代わり、幸い健康なのでこれまでの経験と時間の余裕を利用して市民レベルでマチのために役立つことは出来ないかと考えました。それが彫刻美術館の支援だったのです。

**丹保** 行政の箱物を市民が支える、これは欧米では普通にやっていることですね。日本にないだけです。

**橋本** 公共の施設は何かと制限が多すぎて

いけません。蛇口を閉める人の力が強すぎるので、市民が気楽にやろうとしてもできない。21世紀型はオープンで、誰でも参加しながら市民感情で行政をリードできるようになりたいと思います。

**丹保** 賛成ですね。北大にいた頃、大学と地域人が交流できる施設として「遠友学舎」というのを作りました。地域の人にフリーに使ってもらおうと。でも土日は使わせないとか言うので怒鳴ってしまった。鍵なんか近くの喫茶店に預けておけばいいです。みんなでオープンにするのがいい。

**橋本** 札幌には本州にない特徴を持った芸術・文化がありますが、市民は気づいていません。札幌市の芸術・文化を我々がどう見つめ、サポートしてゆくか、これらを受受して高めていくのは市民なのです。権力や財力のある人がやる時代ではなく、健康で、経験があり、やる気のある人がやる。

これが財産なのだと思います。いまや団塊の世代の 60 代の人たち、この人たちはその意味で宝ですよ。「遠友学舎」のように大学がもっと主体的に外部に出て支えてくれるといいですね。

**丹保** 大事なことですね。行政の人間はシステムがあるから出来るのです。彼らの権力では出来ない。官僚は組織のルールの中でしか工夫しない。それを越えるものはお上のやり方では出来ません。

**橋本** それを変えるのは誰か。それは市民だと気づく感覚が末端の中になければ変わらない。

**丹保** そうですね。

**橋本** 昨年秋、友の会の主催事業で先生の開拓の村へ行きました。あそこのボランティアの人たちはすばらしいですね。

**丹保** いい人たちがいっぱいいます。立派なチームです。基本は人なのです。ボランティアの人たちは一家を成した人たちばかりだから、その豊かな経験をこちらはそっくりいただける。価値があります。下敷きになる部分を手伝ってあげれば活躍してもらえる。官僚組織ではそれが出来ない。現役は馬力があるが経験不足です。OB は経験豊かです。これをどう組み合わせるかです。今は小さな組織のボランティアですがもう少し組織化されれば違いますよ。

**橋本** 今、友の会では野外彫刻のデータベース作りと取り組んでいます。これは道内に約 2200 あるといわれる野外彫刻を写真に撮って、これを地図に落とし、どの彫刻がどの場所にあるか、さらに、その作品のデータを瞬時に見ることが出来るというも

のです。いわば彫刻作品の戸籍作りです。この作業を大学とタイアップして作り、観光資源化したいと思っています。大学と市民が一体化すれば新しいシステムが出来、すごい価値のあるものになります。

**丹保** すごいですね。開拓記念館を北海道博物館にしようと高橋はるみ知事が公約しているのですが、博物館になれば情報系の中核機能を持たなければなりません。

**橋本** 情報と文化は一体化しなければなりません。北海道の場合そこが抜けています。箱物の中にあるのは美術品ばかりではない。もっと広大な世界がある。これについて情報を提供するのが美術館の役目です。人手がないからと一歩外に出なければいつまでたってもどうにもならない。

**丹保** IC 時代が来たということでしょう。

**橋本** 札幌市役所のロビーに札幌開拓の祖・島判官の像があるのですが、だれが作ったのかよく見ないと分からない。像を建立した時の市長の名前はすぐ目に付くのですが…。作家の名前が前に出ていなければならない。芸術・文化をうたう作品を作る以上は芸術家の名前が出て初めてそれに対する意味が生まれると思うのです。

**丹保** 僕の生涯の仕事は北大工学部の環境工学の教授。これが一生の仕事で、総長なんて終わった時点で終了です。自分の学問については棺おけの中に入るまで自分の責任ですからね。芸術家だって同じではないですか。

**橋本** その通りですね。

(構成・文責 大内 和)



## 「砂澤ビッキと記念館」

砂澤ビッキ記念館館長 河上 實

ビッキがここ箴島（おさしま）の廃校となった小学校跡へ移り住んだのは 1978 年初冬のことである。その理由は「豊かな自然と豊富な素材、広い制作スペースがあるから」。その言葉通り水を得た魚のように膨大な仕事をこなしていく。制作活動はもちろんのこと、地域住民の一員としての意識から地域を大切にし、常に地域に夢を与え続けた。砂澤ビッキの芸術は現代彫刻という印象が強いが、その前に優れた工芸の世界があり、絵画の世界がある。これらの芸術をビッキの遊び心、自然観がさらに奥深さを醸していく。ビッキの芸術の魅力はこの辺にあるのであろう。1989 年 1 月 25 日、病魔により帰らぬ人となる。享年 57 歳であった。

砂澤ビッキ記念館構想が持ち上がったとき、ただビッキの作品、資料の展示のみならず、ビッキの自然観を表現するため、この箴島の自然も記念館とすることになったのである。ビッキ記念館が「エコミュージアムおさしまセンター『アトリエ 3 モア』」となった由縁である。

砂澤ビッキの生涯は、自然にこだわり続け、彼の芸術も自然と密接な関係にあることは多くの人が認めるところである。ビッ

キはある新聞紙上に箴島の自然を書いている。

『なぜ田舎へ行くのか』と訝（いぶ）かった。それに対して『自然があるからさ』と答えるのだが、ここは深山幽谷ではないし、鬱蒼（うっそう）とした原始林があるわけでもない。自然と人間が融合しているところの豊かさを感じての言葉である」

ビッキの自然観はいつも自然の中に内在しているところに特性がある。ここを訪れるお客さんにはぜひこの自然を味わっていただき、ビッキの心境に迫っていただきたいと思っている。

札幌のアトリエは「モアモア」。新天地ではもっと仕事ができるようにと「モア」をもう一つ足して、新アトリエに「3 モア」と名づけた。爾来 10 年、新アトリエはビッキを見続け、ビッキの死去により、「終の住み処」、そしてビッキ記念館へとその役目を変えて今に至っている。

この記念館のテーマを「ビッキの魂に出合う場所」として館内を 7 つのコーナーに分けてビッキの世界を紹介している。とりわけビッキの遊び心、自然観などが分かっていただけだと思う。

エコミュージアムおさしまセンター・ビッキ・アトリエ 3 モア

上川管内音威子府村字物満内 55 ☎01656-5-3980

◇会期 毎年 4 月 26 日から 10 月 31 日まで◇開館時間 9:30—16:30 月曜休館（祝日時は翌日）◇展覧会のほか木工体験などのコーナーもある。

# 先人の労苦しのび、懐旧の念に浸る

07年10月17日バスツアー 「北海道開拓記念館」「開拓の村」見学



「開拓の村」ボランティアのガイドを受ける一行

## 旧福士家の囲炉裏に故郷のたたずまい

菅野富夫（会員）

札幌彫刻美術館友の会の方々が企画された、北海道開拓の村と北海道開拓記念館見学の一日旅行に家内と一緒に参加し、数年ぶりにゆっくり見学できました。数年前の見学時よりも、移築された建物の数も増え、整備も行き届き、案内の説明も詳しくなったように思われました。漁村群、農村群、山村群と市街地群に大きく区分され、それぞれの特色と生活ぶりが理解できるように展示されておりました。

私は福島県の中通りの小さな地主の家に生まれ、戦後の農地改革の激変の頃、旧制中学から新制高校への変革期に片道6キロの道を歩いて通学しましたので、改革前後の農村の変化も少しは理解できます。

旧福士家の囲炉裏は、改築前の故郷福島のたたずまいそのものでした。桑の根などを囲炉裏で燃やして暖を取ろうとしても、

防寒という思想のない風通しの良い時代の東北の農村の冬の寒さが思い起こされます。この生活様式をそのまま北海道へ移した開拓農村の生活の厳しさは、囲炉裏の風景からだけでも容易に想像され、風邪、高血圧、脳卒中などの病気がすぐに思い浮かびます。

さらに、1969年、北大に単身赴任し、北18条の大学村の官舎に入り、妻子を呼び寄せたときに、その官舎がまさに防寒の思想のない時代の建物で、とても冬をこの家では過ごせないという家内の言に押されて急いで現在の真駒内の家を立てて移り住んだことも思い出されます。この経験からも、「開拓の村」時代の開拓者の厳しい生活がしのばれます。

「開拓の村」が、我が家の「開拓時代」も思い起こさせ、有意義な一日を過ごさせていただき、感謝いたしております。」

## ニシン番屋によみがえった援農の記憶

森 茂樹（会員）

開拓の村のニシン番屋の漁師たちの生活状況を拝見し、60年前の記憶がよみがえりました。昭和20年の終戦の年は中学2年生で、島松に援農に行きました。納屋には「かます入りのニシンかす」が山のように積み重ねられており、農家の大切な肥料でした。私た

ちは昼休みに納屋に行っては栄養源にニシンかすを食べていました。ニシンかすといっても、立派な身欠きニシンです。「かます」というのはわら、むしろを二つ折りにして袋状にしたもので塩、穀物、石炭などを入れる大切な袋です。



## 野外彫刻がよみがえった!! ―クリーンナップ作戦に参加して

阪崎 健治朗(会員・札幌西ロータリークラブ会員)

札幌市内には著名な彫刻家の作品およそ400点が点在しているそうです。じっくりと改めて作品の前に立つと、そこから作家の息吹が伝わってきますし、北海道を形作っていった先人の姿がしのばれ、苦難の歴史をも知ることが出来ます。名前を聞いただけで誰でも思い出せるような人物の堂々とした彫像が建っているのですが、見上げると、それはもう鳥の糞や風雪に耐えながら汚れに身を任せる哀れな姿に申し訳なさを感じます。

先人に詫びたい思いと少しでもきれいに着飾り直して市民に愛してもらいたいとの願いを込めて札幌彫刻美術館友の会が黙々と野外彫刻の清掃を続けています。そのニュースを知った札幌西ロータリークラブの社会奉仕委員会(宮松忍委員長)は意気を感じて「やりましょう」と立ち上がりました。友の会のメンバーの支援を受けて昨年9月29日の土曜日、総勢22名が大通8丁目に集まってクリーンナップ・プログラムを実施しました。

当日は朝からあいにくの雨。太陽が顔を出すのを待つまで、後楽園ホテルの北田社長ご夫妻のご好意でホテルの喫茶ルームで「雨宿り」。その甲斐あってどうやら雨も上がり、いよいよ作業開始。

ぼくの所属したグループ4人は、7丁目にある田畑一作が昭和44年に制作した「漁民の像」をきれいにした、つもりです。とにかく水をかけ、細かいところは歯ブラシで擦り取り、丹念に雑巾で固まったゴミをふき取り、ワックスをかけ、最後はからぶきをして仕上げる。そんな工程を3、4人一組になって作業をし、ちょうどお昼ごろ終わりました。それでも7体ほど清掃したでしょうか。

作業途中から太陽もまぶしいくらいに照ってきて、乾きも早い。碑文を読むと、漁業組合の婦人部の方々がニシンの大漁に感謝の思いをこめて制作を依頼したと彫ってあります。

ブロンズの像は漁師の父と母、そしてそれを見る子ども、カモメもとまっています。改めて作者の漁師たちへの深い愛情と真剣に魚と向き合う心が伝わってきます。さらに制作の技術の細やかさ、網の表情は細部を観察して制作されたことが清掃してみて初めて知ることが出来ました。だれもが作業を通して先人の思いを深くしたように思います。他のグループの方々も手分けしてクリーンナップし、「きれいになりましたね」と自画自賛しながらプログラムを終了しました。

今回の清掃ボランティア活動のハイライトは、単にクリーンナップするだけでなく、友の会会員で道立近代美術館のボランティアもしている高橋淑子さんがケプロン像や黒田清隆像をはじめ主な作品を丁寧にわかりやすく解説してくださいました。おかげで作品と自分との間にある親近感が増したような気がしました。

程よい疲れを感じつつ散会しました。



クレーン車も出動して初めて行われた大通公園・ケプロン像の清掃作業

## 2008年友の会新年会 1月26日開催

友の会恒例の新年会と講演会を次の通り開催します。

- 日時 1月26日(土) 午前11時から  
(講演会に引き続き新年会に入ります)
- 会場 札幌市中央区北1西2 北向き  
札幌すみれホテルTEL011-261-5151
- 講演会講師  
北海道開拓記念館館長 丹保憲仁氏  
演題「21世紀の日本と北海道」
- 会費 4,000円
- 申し込み締め切り 1月10日
- 申し込み先 齋藤美年子  
(TEL011-643-7246) まで

### 「大通公園を芸術文化ゾーンに」

### 芸術・文化フォーラム開催

友の会から橋本会長らも参加

札幌は芸術・文化が似合うまち。札幌をもっと芸術・文化のあふれるまちにしたい—そんな願いから発足した市民による第2回芸術・文化フォーラムが昨年11月27日、札幌・丸井今井大通館で開かれ、友の会から橋本会長をはじめ会員約10人が参加した。

フォーラムには上田文雄札幌市長も出席、朗読ボランティアの竹村泰子さん、チェリストの土田英順さんによる「札幌讃歌Ⅱ」(原子修作)の詩の朗読と演奏に続いて大道芸の披露などがあった。朗読とチェロの演奏の間には友の会から提供した彫刻写真140点が数回にわたって会場で展示された。

フォーラムに参加した橋本会長は「大勢集まった芸術家や芸術ファンに会の存在を強くアピールできた」と満足した様子だった。

フォーラムはこのあと「大通公園を芸術・文化ゾーンに」をテーマに討論を行った。

## 展覧会案内

### ◇07-08年展

—1月6日まで

さいとうギャラリー(札幌市中央区南1西3 ラ  
ガレリア5階)TEL011-222-3698

### ◇関口雄揮記念美術館所蔵作品展

「北の旅路」(禅林寺画仙堂障壁画小下絵  
図公開)

—2月24日まで

関口雄揮記念美術館(札幌市南区常盤3  
条1丁目)TEL011-593-5050

### 編集後記

2003年(平成15年)から続いた「ギャラリーシリーズ」が前号の16回で、また、短期の掲載となりましたが、「リレーエッセー」も前号で終了しました。今号は「抜海の日」も休載です。対談は「いずみ」では初めての試みでしたが、さすが丹保氏と橋本会長の対談はアカデミックな話で盛りあがりしました。全容紹介のスペースがなく残念でした。(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」No.22

2008年1月1日発行

発行人

橋本 信夫

編集スタッフ

齋藤美年子: 011-643-7246

大内 和: 011-884-6025